

日本木材学会北海道支部 創立 50 周年記念 特別講演会 開催報告

北海道支部研究会理事
(北海道立総合研究機構 林産試験場) 宮崎淳子、西宮耕栄
(北海道大学大学院農学研究院) 幸田圭一、山岸祐介

1. はじめに

平成 29 年 7 月 20 日 北海道大学農学部大講堂において、日本木材学会北海道支部 創立 50 周年記念 特別講演会が開催されました。主催は日本木材学会北海道支部、後援は(地独)北海道立総合研究機構林産試験場、(一社)北海道林産技術普及協会でした。4名の講師をお招きし、これまでの支部活動の歩みを振り返るとともに、それぞれの立場から、今後の活動に対する期待を中心に講演していただきました。筆者らは支部の研究会理事として準備から関わってきました。本稿では、幹事の立場も踏まえて、講演会の概要について報告いたします。

2. 特別講演会

2.1 「日本木材学会の現況と北海道支部への期待」

社団法人日本木材学会 副会長、東京農工大学教授 船田 良氏

船田先生は、現在の東京農工大学の前に、北海道大学で助手、助教授として教鞭をとられ、北海道支部の活動にも深く関わってこられました。この講演では、本会副会長の立場から木材学会の設立や活動についてお話いただくとともに、北海道支部の活動にも長く携わられた経験も踏まえて、支部活動のこれまでと今後の期待についてお話いただきました。

北海道支部の設立は 1967 年で、現在の 4 つの支部(北海道、中部、中国・四国、九州)の中で一番早く設立されました。他の支部の設立は 1980 年代後半～1990 年代前半なので、北海道支部の設立は特に早かったとのことでした。これまで北海道支部で開催された研究会の内容を振り返り、設立当初から、カラマツ材など北海道産材の利用が主要なトピックであったことが示されました。林産業を取り巻く状況は、木構造の発展や新しい木質建材の開発、木質バイオマスエネルギー利用の推進など大きく変化してきましたが、それぞれの時代の要請に沿った道産材の利用が常に課題として掲げられてきたことが紹介されました。また、その成果は、支部会員により執筆された学会誌への掲載論文や、学会賞をはじめとする各賞の受賞暦の形で記録に残っていることが紹介され、支部の活動に対して高く評価していただきました。今後も、地域の技術革新につながる研究を推進し、学会誌の充実など木材学会の持続的な発展と地域社会への更なる貢献を期待するとの激励をいただきました。

2.2 「北海道の木造建築技術と北海道支部への期待」

一般社団法人北海道建築技術協会 副会長、北海道大学名誉教授 平井 卓郎氏

平井先生は、北海道大学大学院農学研究科教授を退職され、現在は(一社)北海道建築技術協会、(一社)日本建築学会など建築関係の団体で活動されています。この講演では、長年携わられてきた大学、学会での活動の経験と、現在の建築実務者の視点に立った活動に基づき、北海道支部と支部会員への要望についてお話をいただきました。

ひとつめに、建築技術者が求める研究者への要望についてお話いただきました。建築の実務現場では、計算による数値評価ができない事象や実験データがない事象に直面することが多く、実際には山勘で対処することも往々にしてあるため、建築技術者は研究者に対し、このような事象への理論的理解に基づいた判断を求めているとのことでした。実務現場に近づくほど事象は複雑で、理論に当てはめることは難しくなりますが、大学・研究機関の研究者には、この課題に正面から取り組んでほしいと述べられました。

次に地域における人材育成の重要性について述べられました。近年、盛んに進められている地域材利用ですが、

いくら道内に豊富な森林資源があっても、それを活用する技術力、すなわち人的資源が不足していると、加工や建築が地域外の企業に取られ、地域経済を活性化させる有効な地域資源にはならないため、人的資源の育成、特に現役の技術者の再育成が重要だと述べられました。北海道建築技術協会や民間の建築団体では、技術者を集めて議論する場を設け、Peer Education（相互教育）により技術のレベルアップを図っておられるそうです。北海道支部でも是非、研究者・技術者が議論する場を設けて、地元の木材利用の総合力の向上のための活動を期待すると述べられました。

最後に、日本経済、世界経済の安定のための、地域の自立の重要性について提言されました。分業化が進んだ現在の産業システムでは、局所的な問題が生じると全体に影響を及ぼします。このようなリスクを避けるためにも、各地域が社会産業基盤を持って自立し、自立した地域同士がネットワークを形成して、社会全体の充足と地域の充足のバランスが取れた社会を形成することが理想ではないかと述べられました。こうした社会の実現のためにも北海道の豊富な森林資源とそれを活用する技術力をセットで供給することを支部には考えてほしいと述べられました。こうしたことは、北海道の産業に資するだけでなく、北海道が自立することによって、日本全体、世界全体の安定化に結びつくだらうと述べられました。

2.3 「北海道における新たな木材利用について」

株式会社イワクラ 環境事業部 部長代理 高橋 賢孝氏

創業から 104 年になる株式会社イワクラは、日本で最初にパーティクルボードの生産を開始し、近年は木質バイオマスエネルギー事業にも注力され、長く北海道の林産業を支えてこられました。この講演では、新たな木材利用用途である木質バイオマスエネルギー事業の北海道における現状と原料収集における課題についてお話いただきました。

北海道内に木質ペレット事業所は、現在 17 か所ありますが、ペレットの生産は大量生産可能な事業所に集約されつつあるとのことでした。現在、道内の木質ペレットの生産量は年間 7000～8000t で少ないですが、まだまだ伸ばせると考えておられるとのことでした。また、木質バイオマス発電所は、規模の大きな事業体が 4 か所あり、PKS を含め 50～60 万 m³ の消費が見込まれているとのことでした。こうした中、建築解体材が減少していることもあって、木質ペレットやパーティクルボードの原料を入手することが困難になっているそうです。イワクラでは、必要量を確保するために解体材や林地残材、梱包材の廃材、また災害被災木も収集しているとのことでした。昨年の台風被害で流出した河川流木、海岸流木も収集されたそうですが、付着する土砂の除去に手間がかかること、根を除去しなければならないこと、また海岸流木は塩分を含むため、用途が限定されることなど、災害被災木の利用技術には課題が多く残されていると述べられました。未だ被災地では流木の処理が進んでおらず、早期復興のためにも流木利用の技術的課題の解決、行政を中心とした災害被害木の収集システムの構築が必要であると述べられました。こうした現状と課題が、北海道支部における今後の研究課題へのヒントとなり、企業の需要拡大につながる研究に発展することを期待すると述べられ、講演を終えられました。

2.4 「この 50 年間の後先～林産試験場の試験研究から～」

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 林産試験場長 及川 弘二氏

及川氏は、林産試験場長に就任される前に、長く北海道庁で林務行政に携わってこられました。この講演では、長年の林務行政の経験と林産試験場長の立場から、北海道支部設立当初からの現在まで 50 年間の林業・木材産業から見た社会経済情勢と林産試験場の試験研究の歩みを振り返り、今後の研究の方向性についてお話いただきました。

北海道支部が設立された昭和 42 年当時の林業・林産業の情勢は、高度経済成長に伴い木材の需要が大きく増大し、木材の自給率は 94%、北海道内の製材工場数は 1000 工場以上あるといった状況でした。林産試験場では、製材・乾燥・合板・きのこに関する基礎技術の確立と技術移転、木材糖化など木材の完全利用を目指した研究が進め

られていました。その後、オイルショックで景気全体が落ち込み、一時は木材需要も低迷したものの、バブル経済で再び木材需要量は増加しました。しかしながら、プラザ合意やガット・ウルグアイラウンド合意による貿易自由化の流れに乗って品質が良く安定供給可能な SPF やホワイトウッドが大量輸入されて、道産材供給量は大きく減少しました。この頃から林産試験場の研究課題から木材の完全利用という色合いは薄れ、需要拡大が大きな目標として強く押し出されるようになりました。近年では、新興国での木材需要の増加、原木輸出の規制など、木材輸入を巡る状況が変化する一方で、国内の森林資源は利用期を迎えており、輸入材から国産材にシフトするための取り組みが強力に押し進められています。今後は、木材利用量を減少させないために木材の利用者を一般住宅の施主である個人から、高層の集合住宅や非住宅など自治体や企業などにシフトすること、またエネルギー利用とマテリアル利用とのすみ分けを徹底し、木質バイオマス資源の安定供給を目指すことが必要であると述べられました。

この 50 年間で、木材需要の減少は 3 割で留まったのに対し、道産材供給量は 6 割も減少しました。これは道産材が安定的に供給されないことが原因と考えられ、森林の調査方法の再構築が必要であると述べられました。また大規模集約化が進む製材工場について、地域経済を支える産業としての役割を再考すべきであると述べられました。製材乾燥と流通の最適化を図りつつ、木材産業の基本である一次加工をどのような形で残すのか、地域と業界が一緒に考えていく必要があると述べられました。

3. おわりに

本講演会には、61 名の方が参加されました。講演会の後、北海道大学内のファカルティハウス「エンレイソウ」レストランエルムで祝賀会が行われ、36 名の方々が参加されました。また来賓として、九州支部の堤支部長にお越しいただき、支部間の交流を深めることができました。

ちょうど 10 年前の創立 40 周年では、記念講演会・祝賀会の開催の他、記念誌を発行し、盛大に執り行われましたが、今回の 50 周年では記念誌は作成せず、記念講演会・祝賀会を以って祝うことにいたしました。北海道支部会員は減少しており予算が縮小する中、支部の主要な活動である研究発表会や研究会を重視した結果、40 周年と比較するとやや規模の小さな催しになりました。会としてはささやかであったかもしれませんが、林業・木材産業に追い風が吹いている中で 50 周年の節目の年を迎え、改めて産学官、各方面の方々から支部活動への要望を聞かせていただけたことは、大変有意義であったと思っております。この講演会が、今後の支部活動の活性化につながり、北海道の学術と技術の振興、木材産業の発展に資することを期待します。

最後になりますが、4 名の講師、来賓の皆様、記念講演会、祝賀会に参加してくださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

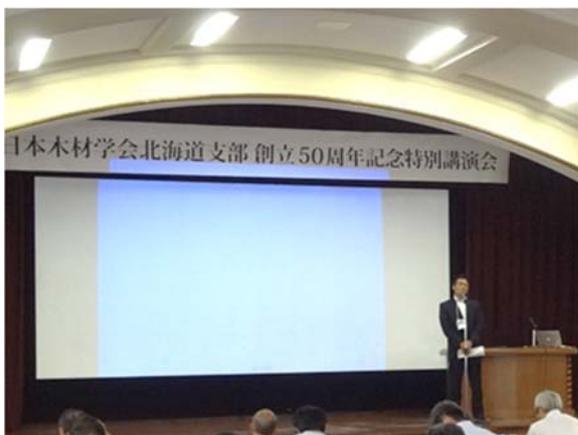


写真 1 森支部代表の挨拶



写真 2 船田先生の講演



写真3 平井先生の講演



写真4 高橋氏の講演



写真5 及川氏の講演



写真6 佐野副支部代表による閉会挨拶



写真7 祝賀会 (挨拶)



写真8 祝賀会 (来賓挨拶)



写真9 祝賀会



写真10 祝賀会 (閉会の挨拶)